

震災後の空間設計と復興したまちの空間認識・利用に関する調査研究
 —阪神・淡路大震災における神戸市長田区御蔵地区を事例に—

A Study on the Relationship between Spatial Design and Use of Reconstructed Town
 -The case of the Mikura district on the Great Hanshin-Awaji earthquake-

山根 彩香

Ayaka YAMANE

SUMMARY

This study is an analysis report of an interview research for current residents who live in the devastated area by the Great Hanshin-Awaji earthquake and a planner who designed the town at that time. This research clarified as follows: 1) the town which aimed and planed about 20 years ago is how to perceive and use by current residents on the view of spatial elements. 2) To what extent fulfilled the town aimed then analyze each spatial elements. 3) Elements reveal from analyzed spatial elements as clues of proceeding urban reconstruction.

KEYWORDS: Hanshin-Awaji earthquake, urban reconstruction, spatial element, spatial transfiguration, relevance

1. 研究の背景と目的

自然災害の発生によって、人々は被害を受ける。その後の復興まちづくりは空間を再構築し、そこに住む人々に様々な影響を与え、その後もまちは変容していく。本研究は阪神・淡路大震災後の復興まちづくりが行われた空間において 20 年近く経った現在の生活者が空間をどのように認識し、利用しているのかを事例を用いて明らかにする。加えて当時の意図や思いに対して実現しているかを空間要素ごとに分析し、復興まちづくりの手がかりとなる要素を示すことを試みたものである。

2. 調査結果

平成 25 年 11 月 10 日～25 日に現在の生活者 11 名に地区の空間や地区での生活について住宅地図に内容を書き込みながらヒアリング調査を行い、当時の設計者 1 名には 12 月 12 日に同様に住宅地図を利用しながら当時の設計過程での空間へ意味づけとそれに伴う設計上の配慮についてヒアリング調査を実施した。その内容をもとに地区内を特徴ごとにゾーニングし、空間要素に分類して住宅地図上にまとめた(図 1)。さらに各要素において現在の生活者の認識・利用状況と設計者の当時の意図・住民の思いを整理し、現在の御蔵地区で当時の設計意図や思いの実現について評価した。その中で設計時の意図・思いが実現されている空間要素として 8ヶ所を抽出した(表 1)。



図 1 生活者へのヒアリング内容をまとめた認知地図

表 1 抽出した空間要素

空間要素	特徴
みくら5	復興まちづくりの拠点として機能し、現在も地域の住民の拠点となっている
御蔵北公園	地域内外の利用者によって多様な利用が聞き取れた
芝生(御蔵北公園)	復興当時に住民によって植えられたもので、地域の活動にも取り入れられている
煉瓦の入り口(御蔵北公園)	同じく住民が協働でつくった
花壇(御蔵南公園)	住民自身が手を加えられる空間として機能している
クスノキ(御蔵南公園)	震災時に焼け跡がついており、被災経験者にとって生命力を感じさせるものとなっている
御蔵南公園と自治会館近くの路地	設計時には自動車の交通量に配慮した空間であったが、現在は認知地図から分かるように子供たちが遊び、住民同士が立ち話やおかずのやりとりがされる空間となっている
御蔵南公園の東側の住宅周辺	

3. 7つの要素

本研究の調査をもとに、復興空間設計の構成要素を提示する。

- ①**日常への帰還本能**：「元通りの生活がしたい」という思いを指し、震災後の御蔵地区では住民全員がまた一緒に暮らせるように御菅第2,3住宅が建設された。
- ②**被災記憶の継承欲**：「震災の記憶を残したい、語り継ぎたい」という思いは御蔵地区においては公園内に慰霊碑、被災電柱、芝生やクスノキなど様々な形で残された。
- ③**未来への投資**：これからの災害に備えようという意識は、震災後の御蔵地区では御蔵南公園の簡易トイレや貯水槽、避難所をかねたグラウンドの設置につながった。
- ④**人の存在を感じる拠点**：いつでも「誰かがいる」と感じられることで地域の人が自然に集まり、住民同士がつながる場所を指し、御蔵地区ではみくら5が現在に至るまで地域復興の拠点としての機能を持ち、定期的に住民が集まる。
- ⑤**地域のソトとナカ**：地域内にある異なる役割を持った空間の存在を指す。御蔵地区では御蔵北公園と御蔵南公園が地域内に静と動が共存する空間をつくり出している。
- ⑥**住民の生活の舞台**：ひとかたまりの住宅のごく近くにある「ちょっとした」空間を指す。御蔵地区では御蔵南公園と自治会館近くの路地、御蔵南公園の東側の住宅周辺の空間が、設計当時には意図されていなかったにも関わらず地域の人間関係を形成する場となっている。
- ⑦**緑の存在**：御蔵地区での芝生、煉瓦の入り口、花壇、クスノキのような緑を指す。空間における役割を果たし、住民との関係が築かれている緑はその存在自体が居住年数や被災経験に関わらず生活者にプラスの印象と心情を持たれており、人に本能的な癒しを提供している。また、被災記憶の継承においても慰霊碑や被災電柱などの形に比べて、20年近く経っても記憶を残しながらも生活者からプラスに受け止められている。したがって、緑が人の思いを代弁し、震災直後の思いを現在においても伝えるのに効果的であると言える。この点においては時間の経過と生命力を感じさせる点が効果を発揮していると考えられる。

最後に、以上の7要素の中でも④～⑦の要素は震災から約20年経った現在も当時の意図・思いが実現されている空間要素をもとにしているため、災害後の復興まちづくりの設計時に意図することができ、かつ実現が可能と考えられる要素であることを強調する。

4. 結論

本研究は阪神・淡路大震災での被災から19年経った地区を例に復興まちづくりの手がかりとなる要素の分析を目的としている。本研究での生活者と設計者への調査と空間要素ごとの分析から、7つの要素を提示した。しかし、この要素が語る内容はコミュニティの活動の場や緑の配置等、まちづくりや都市計画においてよく知られていることであった。現在、復興まちづくりの手法が確立されていないが、本研究を通して現存の都市計画論の手法をどうアレンジしてとり入れ、そのまちに必要なとされている働きの補完やまちの現状に有効な手法の思案がされるべきだと考える。一方で、復興まちづくり特有の「震災の記憶をどのように残すのか」という課題について、震災という重みある内容を後世に伝える際には内容を受ける側への配慮が不可欠ではないか。配慮に関しては緑や水等の時の流れを感じさせながら人が本能的な安らぎを感じるような自然に近いものをアレンジして残すことを提案できる。

復興を「復興のパネによる新しい社会の質を獲得する過程」¹⁾として、まちが付加価値を得る過程を復興まちづくりとすれば「もとの生活に戻りたい」と語る被災者の声とどう対峙すればよいのだろうか。まちが直面している課題に取り組みながら、復興まちづくりの提案に込めた意図をどう住民に伝えて、イメージしてもらうかも課題であると考えられる。被災者の声のもとにあるまちへの思いを本当の意味で反映し、まちが発展していく為にも、既存のまちづくり手法の意味合いが確認され、活かされながら復興まちづくりの手法が構築されることを期待する。

引用 参考文献

- 1) 室崎(2009)「報告：災害後の復興のあり方について」
http://www.fukkou.net/publications/bulletin/files/book_008_murosaki.pdf(2013.8.13)
- 2) C・アレグザンダー他(1984)「パタン・ランゲージ —環境設計の手引き」、鹿島出版会
- 3) 阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク(1997)「阪神大震災復興市民まちづくり支援ニュース きんもくせい」
- 4) 藤井、樋口ら(2003)「阪神・淡路大震災被災者の復興意識と評価に関する研究」日本建築学会近畿支部研究報告集 pp429-436
- 5) 田中ら(2007)「復興土地区画整理事業による市街地空間の再編とその評価に関する研究-阪神・淡路大震災における御菅地区の事例を通して-」、日本建築学会計画系論文集 第618号 pp57-64
- 6) 越山(2008)「阪神・淡路大震災後の大都市における空間変容認知と復興評価に関する調査研究」、(社)日本計画学会 都市計画論文集 No.43-3 pp965-966
- 7) 越山(2011)「阪神・淡路大震災復興におけるアメニティ空間の評価に関する考察」日本建築学会大会学術講演梗概集 pp965-966